

# 『私の歴史』を考える — 個人の記録・個人の史料を読む —

佐久間 俊明・大串 潤児・佐川 享平

佐川 佐川でございます。鼎談の司会をさせていただきます。

今日、佐久間さんと大串さんからご報告をいただきましたが、この講演会は総研大の公開講演会ということで、あわよくば、この講演会で総研大に興味を持って、入ってほしいというのが一つの目的になっているということがあります。導入は、佐久間さんに総研大の思い出を伺うところから入ってくれと言われました。

安田常雄さんのお話は講演の中でも何回か出てきましたが、お亡くなりになった安田さんが佐久間さんの指導教員だったということなので、その辺りを少し簡単にお話しただけだと思います。

佐久間 総研大をなぜ選んだかといいますと、私の場合は安田常雄先生がいらっしやるからというそれだけの理由で決めました。私は学部と大学院が明治大学なのですが、たまたま学部の時に一年間だけ日本思想史の授業をお持ちになられたのが安田先生でした。

大学院の安田ゼミに入ってから初年度に読まされたのがネグリ／ハートの『帝国』という本です。当時話題になった本でしたが、なぜ日本史のゼミに入ってからネグリ・ハートの本を読むのだと思っただ記憶があります。ぜひ思想史で博士論文を書いてみたいという思いが強まり、安田先生にご相談をしまして、二〇〇五年の十一月に、三時間ぐらいお時間を取っていただきました。その際にいろいろなアドバイスを頂いて、受験して入学しました。定員は三名なのに、同期は九人いました。当時、専攻長だった安田先生が合格の基準に達しているということと九名とったと後で伺いました。

ちょうど私は二〇〇六年に入ったのですが、どういう時期かといいますと、歴博の第6展示室の準備が一番進んでいた時期でした。ですから、私の院生時代はほぼ第6展示室の準備期間と重なっており、リサーチアシスタントをやりながらそちらの仕事にも携わせてもらいました。そのなかで研究会などもよく開かれていまして、大串さんとも一緒にさせていただく機会がありました。大串さんには長野県での調査に同行していただいたこともあるのですが、交通費・宿泊費を総研大／歴博から援助いただいたのは本当にありがたかったです。

佐川 ありがとうございます。総研大はいいところだということが伝わったかと思えますので、ぜひご検討いただければと思います。

今日、佐久間さんからは個人雑誌『古人今人』を通して、戦時下の生方敏郎の思想を住まいの位置に即してたどるという方法でご検討されました。主張の内実とともに、その主張が発せられる媒体、個人雑誌の性格や日常生活への視点を織り込みながら、生方の思想を考える報告だっただけだと思えます。

大串さんの報告は、白鳥邦夫という人物と、彼が中心になっている山脈の会と『山脈』という雑誌の試みを検討したものでした。さらにそのことをより深く捉えるために安田常雄さんの問いについて考える、というような趣旨であったかと思えます。

本講演会のタイトルに「個人の記録・個人の史料」が入っています。個人雑誌とサークル誌で結構性格が違うようにも思うわけですが、一方で、佐久間さんが取り上げた生方の『古人今人』は読者がいるというだけでなく、実はさまざまつながりの中で作られているのだという話でした。

大串さんの山脈の会も、まずは「私」がいて、それが複数化して集団化するということが言われている。単純にみんなで作っているというような話でもない、ということが言われていたと思えます。そんなことを踏まえながら、大串さんが出してくれた論点を佐久間さんに投げるような形でお話を進めていければと思います。

生方は、戦時下に自由主義の感覚をどのように保っていたのか。藤田省三さんの話を引きながら、自己批判の視点を持っていたということがお話の中に出てきました。では、その自己批判の視点というのはどういうふうを持ち得ていたのだろうか。

そのことを今日の報告では、個人雑誌というメディアの性格や、あるいは日常生活にも着目していただいていたので、そういったところからどのように考えることができるのかを佐久間さんに伺いたいと思います。

**佐久間** 自己批判の視点ですか。なかなか最初から大きな問題を頂いて、どうお答えしたらよいのかなというところなのですけれども。批判をする時に、生方は鋭い批判をするわけですが、それは私が研究している清沢でもそうですが、批判をしている鋭い私がいるわけですね。一方で、その私を冷静に見ている私というのでしょうか、それがやはりいるのではないかと思います。だから非常に厳しく、さまざまなレトリックを練り広げながら批判をしているという生方と、同時に引いて、その自分自身を批判的に見ている生方敏郎の視点というか。優れたジャーナリストは、そういう複数の私というものを持っているのではないかという気がします。

あとは状況に対して距離を置くといいですか、そこに没入しすぎないというのでしょうか、そういう姿勢を保っていたのではないかと思っています。

**佐川** ありがとうございます。大串さんも、何かあれば。

**大串** いまの議論は、いったいどういう問題を論じているのか、という話なのですが、少なくとも生方の、少なくとも今日紹介された事例に即した論点ということにすると、基本的には「戦争の時代に、一人の「私」は、どう時代に抵抗できるのか」、そういう「問い」がたぶん佐久間報告の後ろにある「問い」だろうと思います。

かつて家永三郎さんは『太平洋戦争』（第二版、岩波書店、一九八六年）という作品のなかで、

日本の民衆は、大枠でいうとナチス・ドイツやイタリア、特にイタリアとは違って、自らの力で戦争を終えることはできなかったと述べています。そうした事実象徴されるごとく、戦争中の日本の庶民、民衆というのは、基本的には権力、もしくは戦争に抵抗することができなかった。にもかかわらず優れた個人がいて厳しい時代のなかで権力や戦争への抵抗を行っていた。そういうかたちで、戦時下抵抗を高く評価する。そのことによって民衆が持っている問題性を、良くも悪くも考える。家永さんの『太平洋戦争』の構成、特に戦時下民衆の評価をめぐる叙述はそういう組み立て方になっていたと思います。

家永さんの問題提起、それ自体は優れたものであるし、言われていることはそれはそうなんだけれども、『太平洋戦争』を読んだ読者がこうした問題提起・歴史叙述から何を考えたのか。もちろん、読み方はいろいろあったでしょうけれど、「ああ、こんなに優れた人がいたんだ」と、戦時下における日本の人びとの生活の幅みたいなものを自覚すると同時に、荒っぽく言ってしまうと、ああいう優れた人に戦争への抵抗はできるけど私にはできない。戦時中に抵抗した人びとを、ある意味、「優れた人」としてまつり上げて、「自分には戦争や時代への抵抗などできない、だって自分は弱いんだもの」というかたちで、ある意味で自らの生活史の幅そのものを括弧に入れてこなかったらどうかと、私などは思っているわけです。

それは家永さんの問題提起が「悪い」というよりも、「暮らしのなかで民衆が抵抗する」ということはどういふことなのか、戦後、人びとはある意味できちんと考えてこなかったということでもあるかと思えます。そうしたありよう、それをどう見なおすかという文脈のなかに今日の報

告で提起されたものをおいてみる。生方敏郎・『古人今人』の例でいえば、生方個人が時代を見る眼や暮らしの営みと時代との拮抗という点において優れていると同時に、ある意味では当然なのですが、そうした生方の生き方、暮らし方を支えた人びと、そのネットワークとしての生方を支える社会があるんだ、と思うんですね。

それはたぶん、今日の佐久間報告の論点でいうと雑誌『古人今人』の「読者の厚み」ということでもあるのかもしれない。生方のみならず、戦時下抵抗でいえば、清沢洌（佐久間俊明『清沢洌の自由主義思想』日本経済評論社、二〇一五年）であったり、正木ひろし（家永三郎『権力悪とのたたかい―正木ひろしの思想活動』三省堂、一九七一年）であったり、個人として優れた抵抗者として描かれがちなだけでも、そういう人たちがどういう社会やどういう人びとの関係によって個人として支えられていて、戦争や時代への批判的視点を持ち続けること、つまり抵抗することができたのか。

逆にいうと戦争というのは、人びとの「抵抗のためのよすが」と言ったらいいのでしょうか、そういうものを切り刻み、奪っていくわけです。そういう論点として「戦争と抵抗」という議論を組み立ててみる。そうすると、「優れた人が抵抗しました、弱い民衆は何もできませんでした、だって言論弾圧でもものも言えなかった時代なんですよ」という認識や通念（諦念？）から戦争下の民衆の姿についての議論を一步進めることができるのではないか。

そういう問題設定の中で、戦時下の個人雑誌をもう一回読みなおす。その場合も個人の雑誌としてのみ読むのではなく、先ほどの安田常雄さんや『山脈』の例でいえば、ある種の出会いの中

であの個人雑誌もあつたわけだから、その出会いの質。そこに裏返って反映している人びとつながりみたいなものをどれだけわれわれがつかまえるか、つかまえ得ることができるのかというのが議論のポイントではないかと思えます。これが一つ。

もう一つは佐久間さんの応答についてです。いや、分かるんです。分かるんですというのは、「私」のなかに「複数の私」——言い換えれば「二つの目線」——生方でいえば「自分自身を見ているもう一つの視点」の存在というの、おそらく全然そのとおりなのですがしかしそのことは結構大変なことなわけですよ。逆にいうと、常日頃私たちは、「もう一人の自分」を意識していませんよね。いやいや、意識している人がいるというなら、それはそれでいいです。でもおそらく日常生活のなかで「もう一人の自分」からの「問いかけ」が心の中に鳴り響いていてもたぶん、「あ、電車が来た」とか、「おながが空いた」とか、「ちよつとトイレに行こう」とか、さまざまなかつ膨大な些事のつらなりという生活の中でそうした違和感や「問いかけ」は押し流されていって、時代への違和感とか、ある瞬間で「うっ」と感じる身体を通じた違和感みたいな部分は常に忘れさられていく、内面に抑圧されていく、といつてもいいかも知れません（安丸良夫『出口なお』朝日新聞社、一九七七年「現在、岩波現代文庫」）。忘れ去つていかないと生活できませんからね。

そういう意味では、日常生活の違和感をずっと維持し続けるのはとても精神力がいること。だから「自己批評性」ともいいますが、「二つの目線」というのはとてもよく分かる概念あるいは見方ではあるのですが、同時に、それをどのように民衆の知恵として持つことができるかを分

析する、あるいは理解するのはとても難しいことなのではないかと思えます。だから、思想史研究のなかで民衆や個人（個性）を問題にするという場合、その見通しはどうでしょうか、みたいなことが佐久間さんへの「問いかけ」としてはあるのですけれども。

そうした議論を考えてきたときに、一つの見方で言うと、「その人個人の中に、かつて自分の人生や価値観を揺さぶるような体験や個人との出会いが、どれほどあったのか」というのが重要なポイントになるのではないかと私は思っています。

今日は紹介しませんでしたでしたが、先ほどの個人雑誌を支えるネットワークとも関わって、佐川さんは知っていると思えますけれども、植民地期に朝鮮半島から渡ってきた朝鮮の人たちを、大阪での生活の細々としたお世話こまごまをしていた。今風に言うとな行政書士のような役をしていた、中濱、何て言いましたっけ。落語家…。

佐川 米團治。

大串 あ、桂米團治。四代目桂米團治、本名は中濱賢三といったかな、彼、行政書士をやっているんですね。大阪は朝鮮人が多いものですから、渡航に関する書類など、いろいろな書類を整えることが出来ない。その書類が書けないとか、整わない時に、彼らの生活を聞きながら「代書」＝行政書士業をやっているのです。落語として彼が作った作品（代書屋）の中には、朝鮮人に対する差別意識などもあるのだけれども、朝鮮人と暮らした中濱の経験がふまえられている。その彼が戦時中にどんなことを書いているか。私は大阪人である前に日本人である。日本人である前に人類である。「自分を「日本人」なる範疇に押し込んで人類たることを忘れる様に強制さ

る、のは迷惑も甚だしい」と戦時中に書いています（杉原達『越境する民―近代大阪の朝鮮人史研究』新幹社、一九九八年「現在、岩波現代文庫」、四三頁）。

どうも中濱さんの姿勢の中には、もちろん私は大阪人、日本人、もしくは日本国民という意識もあつたでしょうけれども、それよりも何よりも人類だという発想が頭の中で響いていた。その人類という姿勢があるがゆえに、同時代に声高に語られる「国民」とか、「少国民」という言葉もありましたよね、「皇国臣民」というものに対するブレイキになっている。

そのブレイキになっている経験の一つがもしかしたら、いわゆる他者として存在しているだろう植民地から渡ってきた朝鮮の人たちと生活問題を、ある種、共にするというか、そういう経験だったのではないかと、私などは思います。そうした事例も戦時下抵抗の一つのあり方、あるいは抵抗を見る視点としても、さらに議論できるのではないかと。

佐久間さんが紹介された藤田省三が言う自己批評性みたいなものを支える、かつての他者経験みたいなものの厚みを、個人の手紙や日記、エゴ・ドキュメントを分析する時に、われわれがどのように見つけ得るか。そこがたぶん方法的には重要になってくるのではないかと私は思っています。少し長いコメントですが。

佐川 大串さんは鼎談であまりしゃべることはないとおっしゃっていましたが、そんなことはなかったですね。

私は佐久間さんのご報告で、封筒を届けてくれた人がいる、封筒を作ってくれた人がいる。どういう人なんだろうと。そういう人がまさに生方の抵抗を支えていたのではないかと思いました。

今の大串さんの話を受けて何かありますか。

**佐久間** 既に語り尽くされてしまったところがあるのですが、生方の話でいうと、私はまだ生方の戦後の個人の日記は読んでいないのですが、面白くないというのが読んだ人の感想です。それを鶴見俊輔さんが書いているのですが、先ほど大串さんがおっしゃったように、結局、生方を支えているネットワークがあるわけですよ。そういうのが戦後に失われてしまって、時代との緊張関係や接点が薄れていくにつれて、彼の言論自体が面白くなっていくと指摘されています。

生方は非常に面白い文章を書いている人なのだけでも、結局、彼だけでなく、彼の読者であったり、あとは今回あまり紹介できなかったし、今後も調べていかないといいませんが、彼は早稲田の出身ですから、そこでの文士のつながりみたいなものがあった、そういうところを今後解明していくと、さらに広がっていくところがあるのかなと思っています。

正直、今回生方を調べてみて思ったのですが、本当に分からないことが多い。戦争中、どうやって生活していたのかよく分からないんですね。貧乏だと、自分は「昭和六無齋」で、ないないづくしだと言っているけれども、どのように生計を立てていたのか分からない部分があります。そういったところを調べていきたいと思っています。

**佐川** 佐久間さんは清沢洌の研究で博論を書かれて、今後はまた新しく、生方のことを深掘りしていくという形になるのかなと思います。

もう一つだけ別のお話をさせていただこうと思います。今回は「『私の歴史』を考える」とい

うテーマで講演会を行ったわけですが、大串さんから「世界はなぜ仲良くできないの？」という切実な問いのお話がありました。今、『私の歴史』を考える」というスタンスの必要性、あるいはそういった視点に立つことで見えてくるものについて、お話をさせていただきたいと思います。

佐久間さんは高校で教壇に立たれているわけですが、大串さんが学生からの問いかけに答えるには、というお話をされました。特に今、教育の現場で「歴史総合」という新しい科目が始まっている中で、今回取り上げた『私の歴史』を考える」方法から、どういった構想というか、意味というか意義というか、そういったものがありえるのかをお伺いできればと思います。

佐久間 大きな問題を頂きましたが、切実な問いというのが大串さんの話からありました。その点で私は「歴史総合」に期待しつつも不満を持っているところがあります。

というのは、新課程になってから教科書の構成が大きく変わりました。これまで教科書というのは説明がズラズラ書いてあることが多かったと思いますが、最近の教科書は問いが載るようになりました。さらに問いを表現する、すなわち、生徒たちに問いを立てさせることをやらせるようになりました。

疑問を持つことはすごく大事だと思いますが、正直、私は「問いを表現する」という日本語が、言葉は悪いですが、気持ち悪い表現だなという印象をもつのです。そんなに簡単に問いは思い浮かばないだろうと思っているところがあります。

先ほど大串さんが言った非常に切実な問いというのは、本当に日々生きていくなかで、ふと思いつくような問題を大事にしなければいけない。やたらと今はとにかく問いを出してみよ、疑

問を出してみよと言われていて、それは違うのではないかという印象を受けています。

あとは「仲良くできないのか」。逆に私などが生徒によく言っているのは、仲悪くしなければいいんじゃないのということです。仲良くしようとしてしまうと、やはりしんどくなってしまうので。仲悪い状況で生きていくってどういうことだろうか、とか。

ちようど今、古代史を学習しているのですが、奈良時代だと新羅と日本は仲が悪いわけですが、貿易などは積極的にやっているわけです。だから今と同じで、別に国同士が仲悪くなったからって貿易をやめるわけではありません。個人のつながりはあるわけだし、生徒には多角的に考えて視野を広げていってほしいと思っています。

佐川 ありがとうございます。大串さん。

大串 今回、こういうテーマを考えたと同時に、考えざるを得なかったということでもあるのですが、それはアカデミズムで言うと、パブリック・ヒストリーとか公共的な歴史、博物館とか高校の教科書もそうですが、こうした「公的な歴史」、それに対してプライベートのヒストリーは何かということ。それと対になってエゴ・ドキュメント論が盛んに議論されているということの問題意識は何なのかということなんです。ですが、もっと膨大に広がりつつある、TikTokでも何でもいいけれども、SNSを通じたあの自己表現の束というか量というのか、あれは何なのだろうということなんです。

多くのYouTubeやTikTokの内容を見ると、全て他のコピペといってしまうでしょうか、流用であって、オリジナルの、その意味ではまさに「私」がそこにかけられたものというのはそれほどないので

はないかと思えます。その一方で、「キャラ化する」という言葉があるように、他人のものでもそれを流用しながら自分を表現するという、とても複雑な社会に今、私たちはいるわけです。

その時に、近現代、もちろん前近代からそうですが、個人が残した記録や日記、手紙をどういうものとして読めばいいのか。そこに何か歴史の事実が書いてある。そこに素直なその人の思いが書いてあるということすら単純ではない。ということは、もうこのSNSの社会では、みんなが何となく思っているだろう。

にもかかわらず、どんなにフェイクであっても、陰謀論は別にして、そこに何かをかけている若い人たちがもしかしたらいるかもしれない。それはある種大衆文化の問題なのだけど、カラオケに行つて、あいみょんでも何でもいいのですが、それを歌う彼女、彼にとって、あいみょんは他人ではない瞬間があるわけですね。つまり大衆文化というものは、そこに自分を乗せる媒介です。

そうなつてくると、全く自分とは関係ないものの中に自分が乗つてくるといふようなとても複雑な社会を、二〇世紀以降、私たちは体験しているはずなんです。私が歴史を考える、私の視点で歴史を考えるというときには、どういう工夫とどういふ仕掛けと、どのように考えなくてはいけない論点があるのかなとずっと考えていました。だから、素材としては日記や手紙などになるのでしょうか。私の歴史を考える方法を少し自覚的にやらないと、どこかで足をすくわれるのかなというのが思いの一つでした。

もう一つは、今の話と関わらせると、本来であれば高校教育が変わることによって中学、大学

もということですが、「歴史総合」が始まったことにより、教科書をお読みになった方は、あれ？と思ったかもしれませんが、単元の名称が全て「〇〇と私たち」となっています。主として三つの単元で構成されていますが、「近代化と私たち」「国際秩序の変化や大衆化と私たち」「グローバル化と私たち」…。

私たちって、では何でしょう。近代化と私、ではないのです。グローバル化と私、ではない。私たち。その場合の私たちは考え方もそれぞれで、学校の先生方が頑張っているということなのですが、そこにいる子どもたちという意味では、教室の中にいる皆さんのことだよという意味で個々人の問いを、例えばA子さんの問い、B男くんの問いが私の問い。でもそれをみんなでディスカッションしていけば、クラスのみんなの問いになるよねという意味で、私と私たちを考えているのか。私を感じた、この生きづらさや悩みや悲しみが、パレスチナの子どもたちと一緒になんだという意味で私と私たちなのか。

いろいろな自由であっていいと思うけれども、いずれにしても私と私たちというのが、学校の教員が思っている以上に、もしくは大人たちが思っている以上に、たぶん子どもたちには切実になっ

てきているのではあるまいかと。  
ましてや学校の教科書で問いを立てるとか追い立てられている。そうすると、僕の問いって何だろう。先生、問いがないのが問いなんですけど、という問いもありなのか。自分で考えろ、みたいな感じで、中身は空っぽという話になるのでは、おそらくそれは何の解決にもならないでしょう。問いのない（ように見える）子どもたちも問いがあるはずだということを考えると、私と

私たち問題というのは、歴史の問題であると同時に、歴史を見る、まさに今のこの社会の人たちの問題そのものではないかと思っています。

それは言い換えると民衆史とは何だということなのですが、せっかくの公開講演会ですので、単に最近のアカデミズムでエゴ・ドキュメント論や日記、手紙の研究が盛んになっているよ、ではなくて、もう少しなぜそれが大事なのかを、私が感じている今の社会のありようと絡めて話として組み立ててみました。どうでしょう。

**佐久間** 最後にどうしても触れたいのは、自然成長性の話なんです。ここにいらっしゃる方はご存じだと思いますが、不登校の生徒がすごく増えています。小中学生で三十五万人を超えている状況です。私は教員を十年以上やっていますから、不登校になってしまいう子を見ているわけです。

すごく感じるのが、子どもの自然成長性、子どもが本来持っている内発的な生命力があるはずなのだけでも、何かそれを引き出す仕組みになっていない。人生100年時代だから余裕がある人生を歩めばいいのに、生徒と保護者が現役での進学を強く希望していますから、こちらも前倒しで指導していかないといけない。日本史・世界史は教科書の分量も多いのですが、通史を早く終えて欲しいという要望が年々強まっています。「生き急いでいる」という印象を抱いてしまうのですね。

なかなか難しいのは、教育というのは一対四十ですから、個別に見ることはできませんが、それぞれの子が持っている、あるいはそれぞれの人が持っていると言っても良いと思いますが、内

発的な生命力、よく生きたいという思いはあるわけで、それを引き出していかなければいけない。それがどうも、そうならないというか、こちらから逆に子どもに様々なタスクを押し付けてしまっている部分があるのかなと、実はここ数年来、ずっと考えているところです。

自然成長性というのはよく安田先生がおっしゃっていて、今日大串さんも語っていました。それについて私自身は考えをうまくまとめられていないところがあるのですが、歴史研究というだけじゃなくて、教員としてというか、一人の人間としてすごく大事な問題ではないかと思っています。

**大串** 自然成長性という概念は、今日は詳しくお話しできなかったのですが、有名な言葉として社会に広まるきっかけになるのは、渋谷定輔が書いた『野良に叫ぶ』という詩に対する、青野季吉という文芸評論家の批評の中で出てくる言葉です。

対になっている概念は目的意識。目的意識といえば、レーニンの『なにをなすべきか』です。つまり自然成長的に放っておくと、労働者は勝手にストライキをやって自滅していくだけである。そこは前衛党である共産党が目的意識を外から注入して、労働者に正しい革命方式を、という、そういう文脈の中で自然成長と目的意識というのは元来出てくるわけです。

では、私たちは、自然成長性の中身みたいのをきちんと理解し、分析しきっているのか。おそらく戦後の歴史学の中でも、目的意識みたいところはぜひぶん議論があった。私も教員だったので「何を教えるか」ということをどうしても考えがちです。そういう意味では「啓蒙」主義。でも、子どもたちがいったい何を知りたがっているのか、ということを感じ得る私の感度は

年々弱まっているのではないかと思ったりしています。ですであらためて自然成長の復権ということでもあります。

教育の話でいうと、白鳥邦夫とほぼ同時代人で、岩手の三陸沿岸に三上信夫という人がいます。彼が戦後直後にずっと言っていたことは、戦中教育は盆栽教育であったと。つまり鉢が決まっています、そこに植物を植え込んでいく教育。つまり、子どもたちの成長、つまり「芽」が伸びる方向は盆栽（鉢植え）の中、もしくはある形にはまったもので終わりというのでしょうか、そういう比喻で戦中教育を表現しています。盆栽教育が戦中教育であって、これからそれを打破しなければいけないということを戦後直後に三上さんは言っていました。

そう考えると、私たちが知らないだけで、自然成長といいたましようか、子どもが伸びるに任せるということを踏まえながら教育のことを考えていた地域の人たちはまだまだ各地に存在している。そういう人たちを、ある意味では積極的に発掘をしてその思想を描いていくことが、われわれのよく知っているものとは違う意味の戦後思想史、もしくは戦後地域史、広く言うとな戦後史になるのではないかと私は思っています。『日本の歴史』など戦後史の概説を読んでも白鳥邦夫も出てこないし、三上信夫も出てこない。そういう意味では白鳥邦夫が言っていた、私の歴史を集めて私の民衆の歴史を作るといふのは、実はまだ全然できていないとも思えるわけです。

それは逆に言うと、今言ったような子ども、子どもだけではいいですが、人びとが生きている以上、自分の能力を十分に伸ばし尽くすことのできる社会とは何なのか。そのための仲間とは何か、そのために助け合うとはどういうことか。こういうことから戦後の日本の人びとの暮らし、

そこに生きた人びとの思想をきちんと明らかにしてこなかったということになります。そうした反省が私にはあります。今後、地域を歩いて、あ、この人も、この人もと、やはり優れた人は地域にいるよ、という、そこは今後、私としては研究していきたいと思っています。

**佐川** ありがとうございます。自然成長という、安田常雄さんの「問い」というか、晩年にこだわっていたところから、今後の大串さん自身の関心に引き付けて語っていただきたいと思います。佐久間さん、大串さん、どうもありがとうございます。(拍手)